

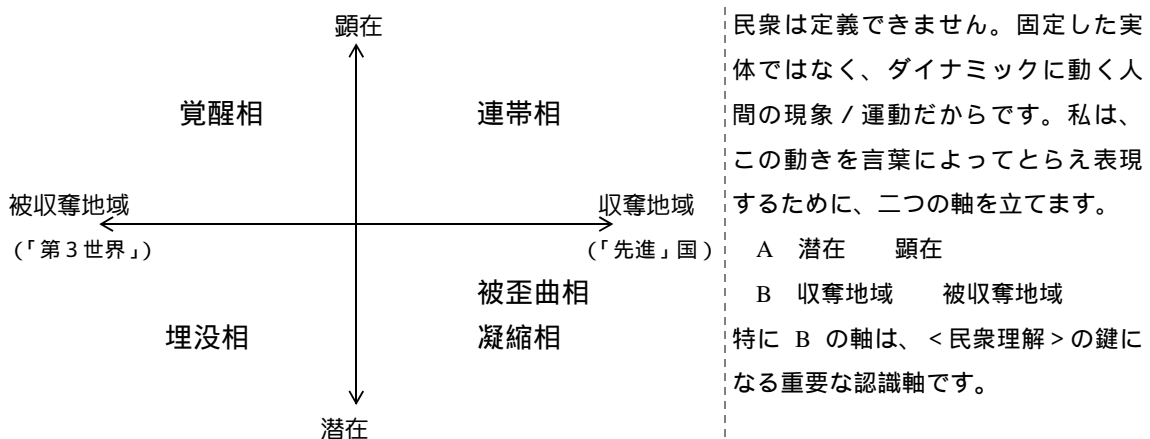
<民衆>の所在

渡辺英俊

「イエスは<民衆>のおかれた<低み>に生き、闘い、死なれた。従って、福音の再生と追体験は、イエスが生きられたのと共通の<低み>に身を置いて、闘い、生きることから始まる」

私の福音理解をテーゼ的に表わせば、このようになると思います。そこで、私にとっては、現代における<民衆>が生きている<低み>とはどこなのか、<民衆>とはだれなのかを問うことが必須となります。その探究のはてに、今ある場所（横浜の寄せ場、寿町）と、今取り組んでいる課題（移住労働者）に至りついたわけです。そして、そこが私にとって、現代に生きて働いているイエスに出会う場になっているわけです。

<民衆>という存在は「概念」ではなく生きている「事実」です。従って、民衆に関わる討論は、理念に関してでなく、<現象>をどうとらえるかをめぐって深められる必要があります。私は、自分が出会い、あるいは直接間接に見聞きした<民衆>という<存在=事実=現象>を、図のようにとらえています。



この二つの軸でとらえると、時と場所を別にして違った現れ方をする<民衆>現象を、「相」(様相)の違いとして見分けながら、同じ存在としてとらえることができます。そしてそこに開け、共有されている可能性を見通すことができると思うのです。

被収奪地域（いわゆる「第三」世界）では、<民衆>は、収奪地域に本拠をおく「グローバル」資本とその「番頭」機能を担う自国政府による収奪・抑圧下におかれながら、支配者の文化・情報操作によって眠らされ、尊厳と自覚を奪われた「埋没相」と、そこからの自己解放を成し遂げていく「覚醒相」との間で現象します。これは、現地に行ってみれば説明を要しない自明の事実として目撃できます。

収奪地域（いわゆる「先進」世界）では、潜在させられた状態の<民衆>は、物量的豊かさや過剰な情報の洗脳で感覚が眩まされ、差別する側に回っている「大衆」としての「被歪曲相」と、被差別マイノリティーの位置におかれ、圧倒的に不利な状況によって人的立ち上がりを抑え込まれてしまっている「凝縮相」とに引き裂かれて現象します。そ

れに対し、自覚化した〈民衆〉は、差別者／被差別者に引き裂かれた状態を克服して、反差別の闘いを共にする「連帯相」において顕在化します。（ここでは『鼓動する東アジアのキリスト教』三〇ページで述べたことを修正拡充しました）。

今日、「グローバル化」と名付けられた国際資本による際限のない収奪によって、世界は貧富の格差が加速度的に増大しています。しかし、私は、ここは神の正義が実現する世界であることを信じています。そしてその鍵は、資本本国と出先国との間で、収奪 - 被収奪の関係に引き裂かれている〈民衆〉が、連帯を作り上げながらそれぞれの自己解放を成し遂げて行くことにありと考えています。両方の世界において、民衆が潜在相から顕在相への解放を成し遂げていくことが「福音」であり、イエスに体现されている聖書のメッセージの核心はそこにあると思うのです。

福音は万人のためのものです。しかし、神はしいたげられているものを偏り見る神ですから、イエスの福音は第一義的には被差別・被抑圧のもとにある　　の〈民衆〉に向けられます。この神の（すなわちイエスの）解放の働きに連なり、みずからの〈民衆〉性を顕在化させていくことを通して、　　の相の人々も〈民衆〉として福音にあずかることができるのだと思います。富める者・抑圧する者も福音から除外されてはいませんが、みずからの抑圧・収奪状態から解放されない限り、「あなたに足りないことが一つある」と言われ続けるでしょう。